タイトル：2024 年度 教育セミナー（第 20 回）
日時：2024 年 9 月 19 日（木）～22 日（日）
場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 大会議室（303）

国家権力の拡大とイスラーム：東南アジア島嶼国の例

東洋英和女学院大学　河野毅

若い皆さんへのメッセージ的な内容で恐縮です。私がオハイオ州立大学大学院政治学部で学んだ時代は historical institutionalism（歴史的制度主義）の最盛期で、ダグラス・ノースやウェインガストの論文を授業で読んでいました。今回は、その潮流で書かれたアセモグルとロビンソンの『なぜ国家は衰退するのか』（ハヤカワ文庫、2016 年。原著は Why Nations Fail, 2012）の理論を使って、今考えていることを紹介します（今年 10 月 13 日にこの著者 2 名を含む 3 名がノーベル経済学賞を受賞しました）。

私の研究目的は、イスラムのリーダー達（ウラマー）は自らが所属する国家で活動する時、何を求めているのかを、制度を通じて考えることです。この視点からウラマーが何を求めているのか調べると、実は様々だという事がわかってきました。

まず、アセモグルとロビンソンの理論はこうです。国家の類型として、繁栄するか衰退するかがあり、それは包括的な政治・経済制度＝繁栄、収奪的な政治・経済制度＝衰退、と分けられます。繁栄する国家は、経済的には国民一人ひとりの福祉を増進することでなるべく多くの税収を求め経済振興をします。経済振興のためには知財を守り創造的破壊を受け入れ競争を促進します。政治的には、経済ルールを公正に執行する中央集権国家があり、国民を満足させるために国家の公正さを維持し、国民の参加を選挙などを通じて求めるため、民主的で福祉を重視する政治体制になる傾向があります。反対に、収奪的な国家は、一部のエリートが富むための課税や資源の搾取があり、国民の福祉はそっちのけの専制的な政治体制になる傾向があります。国家の盛衰を説明するため、制度に注目した研究ですが、重要なポイントは、政治的な制度が先に成立し、経済的制度がその上に作られ、そして政治的な制度と経済的な制度が互いにフィードバックする循環傾向がある、という点です。

一般的には、国家は、ある程度の国民統合を求め、そのために国家はスポーツの振興、教育の拡大、国軍の整備、行政組織の構築などを行います。思想的にはナショナリズムと宗教を利用する国民統合があり、ナショナリズムと宗教は時には統合のエネルギーを出し、エネルギーの強力さの源泉は、国民の死に意味づけをする点です。宗教は天国と地獄という死後の世界を提供し、国家は殉死する美しさを提供します。

では、ウラマーが宗教リーダーとして、国家の正当性を高め、国民統合に寄与するという仮説があるとすると、アセモグルとロビンソンが提示する繁栄国家と衰退国家のどちらにウラマーは役立っているのでしょうか？ウラマーが望みたいのは、繁栄なのか、衰退なのか、です。そこで、これまでの東南アジアのイスラームの研究成果を見ると、随分と様々なウラ

マーの立場が出てきました。マレーシアのウラマーは国家権力に活動が制限され窮屈に思っている（塩崎、2016 年)、反植民地主義（＝新国家建設）運動に歩調合わせるナショナリスト・アラブ人コミュニティー(山口、2018 年)、国家に入り込むシンガポールの「公式ウラマー」(Saat、2018 年)、イスラームをアイデンティティーの一部とする分離主義闘争（アチェの GAM(Sukma、2005 年)、MNLF/MILF(Ferrer、2005 年))、暴力を使って社会分断に積極的に加担するウラマー(Sidel, Robinson, Parry)、市民社会を支えるウラマー(Hefner、2000 年、Wahid、2006 年、 Fadjar et.al.、2005 年)、国家のリーダーが放っておくと混乱しまとまらないウラマー（Kersten、2015 年)、反共のウラマー（Bevins、2020 年)、国家権力に従属するウラマー（Liow、2017 年）などです。

このようにウラマーと国家の関係は、随分と多様であることがわかります。そして、多くの研究ではウラマーと国家間の権力関係が重視されていることもわかります。アセモグルとロビンソンの理論に戻ると、ウラマーは何を望んでイスラームを考えて行動しているのでしょうか？その望みと行動の結果は、繁栄か衰退か？その回答を探すためには、制度、に焦点を当てて研究するべきだとアセモグルとロビンソンは主張します。これを踏襲して、私は教育制度を例に、ウラマーと国家の関係を研究しているところです。